

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03032

研究課題名(和文) 中世東国における寺院什物帳(文物台帳)と請来遺物(唐物)の発展的研究

研究課題名(英文) An Evolutionary Research for the Documents of Valuable Goods in Medieval East Japan.

研究代表者

古川 元也 (FURUKAWA, Motoya)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：60332392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では次のような学術的特色・独創性を示しえたと考えている。1. 中世社会に受容された「唐物」の実体を、政権がおかれた中世東国領域の史(資)料を中心に明らかにした点。2. 禅宗寺院のみならず、東国領域の中世寺院に残された什物帳(文物台帳)等を広範囲に横断的に検討材料とした点。3. 後世の改変や編纂を受けやすい什物目録に対して、史料に対する検証を厳密に行った点。4. 近年、美術史学、考古学の分野で大きく深化した研究成果との接点を見出そうとする学際研究をおこなった点。である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1. これまで一部什物帳(文物台帳)の分析に偏っていた「唐物」研究を、東国領域の寺院什物史料へと広げることにより、中世前期の横断的・面的な理解につなげた。2. 漠然と用いられていた「唐物」概念を明確化することにより、中世における宋元時代舶載文物の特質を際立たせることができた。3. 「唐物」が記載される什物帳を精密に検証することにより、寺院における文物台帳そのものの史料論的検討をおこなった。4. 寺院に伝来し、また遺跡から発掘される中国宋元時代の文物の実体を什物帳と比較検討した。

研究成果の概要(英文)：This research is a one of basic research for the old documents of valuable goods in medieval temple at kamakura district. They say the relations between the temple monk's tastes and valuable goods which comes from China, especially Son, Min dynasty, and this could explain the medieval people's sense of value around East Japan(Togoku). These valuable goods are often called KARAMONO, goods which from China, and it is said that medieval Japanese thought them very important, valuable, generally. But it has possibility that the knowledge and recognition of those at that time was slightly different from the very life things, so this reserch sought into the difference which existed in documents of temples in East Japan. Thought these documents are very few in fact, severe traces of KARAMONO worships and successions could be appeared in this report.

研究分野：日本中世史・博物館学

キーワード：中世 東国 寺院 什物帳 請来 唐物 出土遺物 伝世資料

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、中国大陸および朝鮮半島から輸入・請来された船載文物の研究はめざましく、平成 23 年の歴史学研究会大会古代部会での皆川雅樹氏報告に象徴されるように「唐物」の再検討が関心を集めている。この背景には、従来、主に美術史学、あるいは考古学分野からの関心が主体であった文物の研究に、大陸文物受容史の観点から史料の再検討が行われ、史料と資料の比較検討が活発になりつつある研究の現状がある。

研究代表者が応募時に本務としていた神奈川県立歴史博物館では史料と資料の比較検討に強みがあり、これまでの研究環境において中世社会における「唐物」の実体を探る試みを行ってきた。また、根津美術館『南宋の青磁 宙をうつすうつつわ』(創立 70 周年記念特別展、2010 年 10 月)、徳川美術館『室町将軍家の至宝を探る』(秋季特別展、徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞・文化庁主催、2010 年 10 月)が相次いで開催され、茶道資料館シンポジウム「鎌倉時代の喫茶文化」(2008 年 11 月、京都新聞文化ホール)における村井章介氏講演「輸入文化としての喫茶 - 13~14 世紀の文字資料から -」、京都国立博物館公開国際セミナー「東アジアをめぐる金属工芸 地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究」(2009 年 9 月)における羽田聡氏「中世史料研究と唐物」、家塚智子氏「室町時代における唐物の受容 同朋衆と唐物」らの報告を得るなど「唐物」の実体研究は活況を呈している(後者は久保智康氏編『東アジアをめぐる金属工芸』勉誠出版社、2010 年 7 月として結実)。

このような研究状況の中で、請来文物に対する知見も増加し、研究を進めていく環境は整備されたといえよう。研究代表者は申請時、神奈川県に所在する博物館の研究員であったという立場から、これまで鎌倉地方の諸寺院に残された中世の什物目録(物品台帳)と実際の文物との間の関係に着目していくつかの研究を行ってきた。たとえば、中世における宋元文物の受容が論じられる際の基礎的史料である鎌倉円覚寺所蔵「仏日庵公物目録」に対しては「「仏日庵公物目録」成立に関する一考察」(『神奈川県立歴史博物館研究報告』第 35 号、pp.13-24、2009 年 3 月、単著)、「鎌倉円覚寺「智真夢記」と「仏日庵公物目録」」(『神奈川県立歴史博物館研究報告』第 38 号、pp.1-14、2012 年 3 月、単著)のなかで史料的に厳密な書誌的検討を加え、これまでの「唐物」理解に再検討を促した。また、このほかの関連業績については、研究申請書で記す通りだが、研究申請時に直近のものでは、平成 23 年には「中世唐物再考 記録された唐物」(『唐物と東アジア』所収論文、pp.131-145、2011 年 11 月、勉誠出版社、単著、共著者は島尾新、五味文彦他 12 名)を公にし、中世に受容された「唐物」の実体解明と史(資)料の厳密な比較検討の重要性を指摘している。

以上のような経緯のもと、研究代表者は科学研究費補助金(基盤研究(c)平成 24~26 度、課題番号: 24520732)「中世鎌倉地域における寺院什物帳(文物台帳)と請来遺品(唐物)の基礎的研究」の交付を受け、研究成果の一環として口頭報告「仏日庵公物目録と記録される唐物」(貿易陶磁研究会、2012 年 9 月 29-30 日、青山学院大学)、口頭報告「モノが裏付ける鎌倉の文献史」(中世都市研究会「鎌倉研究の未来」、2013 年 9 月 7-8 日、鎌倉女子大学二階堂学舎、2014 年秋山川出版社より刊行予定)、神奈川県立歴史博物館特別展『世界遺産登録推進三館連携特別展 武家の古都・鎌倉』(図録は五味文彦・西岡芳文・古川元也・高橋真作ほか共編、pp.1-304、2012 年 10 月 6 日~12 月 2 日)、口頭報告「唐物研究資料としての高台について」(神奈川県立歴史博物館調査研究報告会、2014 年 3 月 11 日)を公にし、とくに神奈川県立歴史博物館での特別展では鎌倉ゆかりの文物、出土資料を徹底的に調査・陳列した。その際の図版目録は五味文彦・西岡芳文・古川元也・高橋真作・阿部能久ほか共編の『武家の古都・鎌倉』(pp.1-304)として集成することができた。今回の申請は、鎌倉を中心として一定の成果をあげたここでの研究を、東国領域に発展的に継承し、「唐物」の認識をより広範に検証してゆくことを主眼としている。

2. 研究の目的

本研究は、日本の中世社会(12 世紀半ばから 16 世紀を指定)に受容された大陸からの請来品、いわゆる「唐物」が、実際にはどのような文物であり、どのような意識を持って受けとめられていたかを明らかにする比較史(資)料論であり、また、東アジアの視点に立つ文化交流史である。

具体的には、中世前期に宋元の文物が移入された東国領域を対象とし、文物台帳としての什物帳を残している寺院史料に検討を加えることにより、当該期における「唐物」の位置づけを明らかにし、同時に種々の請来遺品との比較検討によって具体像を明らかにする基礎的研究でもある。

3. 研究の方法

初年度は、従前からの研究代表者の研究等で端緒が付けられている寺院史料の調査研究を行い、美術・工芸・考古分野の遺品研究はそれぞれの研究成果を援用、協業しながらデータ集積に努めた。方法は、実査、撮影、調書作成が主体となる。考古遺物の場合は参考遺品が量的に多いためデータ集積のための雇用を行う。研究手法はこれまでの基礎研究で確立しているため、2 年目、3 年目の研究方針も大きな変更はなかったが、途中、研究成果の展示活動を通じた公開に向けた準備を行った。また、その結果、調査のまとめが遅延したため、研究期間の 1 年延長を申請した。

4. 研究成果

本研究では、当初の計画通り研究を実施したが、個々の資(史)料調査とその所見は、基礎研究であるため、印刷媒体としては学術誌などに報告しにくく、またそのデータ量も多くなってしまった。さらに、寺院の未翻刻資料を、データ媒体で公開することに対しては、ご所蔵者の許可を得る必要があることが一部資料に判明し、データでの公開および報告書での公刊が、研究期間内でまとまった形ではおこなっていないが、個別事例としておこなった。

一方、本研究に付随して行われた、東国寺院の什物研究、また文物研究については、複数の進展があった。寺院や地域に内在する資(史)料の調査は、都合のよい部分だけを成果として公表するだけでは信用を得られないものであるから、今回の一連の研究の中で、副産物としていくつかの貴重な成果が、結果として得られるに至っている。これらは、いずれも研究成果の一部として、公にできたものであるが、ここではそれら成果について、記しておく。

(1) 神奈川県立歴史博物館で実施された「特別展 鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」

本展示は、研究代表者が、研究課題申請時に在籍していた所属で、本研究の一環として成果の公に対する還元として計画していたものである。展示は、人間文化研究機構 博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業『列島の祈り』の一部として平成30年10月27日(土)～12月9日(日)に同館・文化庁主催、国文学研究資料館・国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター・國學院大學博物館・神奈川県立金沢文庫・名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター共催として行われ、研究成果の反映がある展示図録を同名で発行した。このことにより、研究者向け、一般向けにもより高度な次元で、研究の社会還元が可能になったと考えている。

本研究とのかかわりでは、鎌倉の宗社鶴岡八幡宮所蔵の「文化度神器等焼失調書(鶴岡八幡宮諸堂社佛像并神器祭器其外一山諸装束等 文化度神器等焼失調書(朱書))」¹⁾「相州鎌倉鶴岡八幡社其外諸堂社神仏像并道具類新調修復出来形帳」の調査と紹介を行い、焼失して現在では失われている儀礼や祭事使用の具体的文物の詳細について言及した。従来、鶴岡八幡宮の什室については、江戸時代後期の火災で多くの文物が失われたということで、理解されているが、この什物帳を分析することにより、中世から連綿と連なる儀式、儀礼の復元や、楽家の活躍に見られる中央と地方との関係を立体的に理解することが可能となった。一例として、神楽関係の道具には「右、附属品とも長谷預り」記す付箋がつけられているが、この長谷が、御霊神社を指すのであれば、文化の火災に際して、神楽関係の品々が御霊社で保管されたということになることなどを指摘した。

(2) 神奈川県愛甲郡愛川町所在の八菅神社所蔵文書の整理と目録作成

本研究の資料調査の一環として、神奈川県愛甲郡愛川町八菅山に所在する八菅神社所蔵の古文書を研究代表者古川と日本女子大学文学部、神奈川県立歴史博物館(学芸員渡邊浩貴)が主体となり、令和元年(2019)度に悉皆調査し、目録を作成した。調査には、日本女子大学文学部史学科学生をあてた。文書群は、従来氏子組織により保管、管理されてきたものであるが、保存環境などが必ずしも十分であったとは言い切れず、燻蒸を施し、現品照合をかねて行った。地域で保存されてきた貴重な文化財を、さらに確実に後世に伝えるための基礎作業として、地域自治体と協力して行い、目録作成により可視化できたことは収穫であったと考えている。また、大学内においては学生に実地の訓練の場を与えることができた。

本文書群は、かつて慶應義塾大学宮家準研究室による八菅山総合調査(『修験集落八菅山』一九七八年)が行われており、その後も複数の調査機関(神奈川県史編纂室・神奈川県文化資料館・藤沢市等)により調査が行われているが、現状では仮目録と、文書原本との対照が十分できていない状態ではなかった。調査では、文書群全体に対し整理と目視により確認を実施し、既存の仮目録と照合する形で新たに目録を作成した。調査の過程で再確認したことに、八菅山に伝わる近世史料(テキスト)の多さがある。また、世代交代や転居により史料の所在が確認できなくなっているものも存在している。八菅の修験は東国文化圏の中で再認識する必要があるが、儀礼の側面においても、寺社に伝わる儀礼が文字(テキスト)となり、それが残されているからこそ、儀礼が途絶えてしまってもある程度の復元が可能になることが明らかとなった。

なお、この目録は、同神社氏子組織と愛川町教育委員会、神奈川県立歴史博物館、日本女子大学古川研究室にて保管している。

(3) 佐野知三郎資料の調査と目録化

本研究の資料調査の一環として、在野の石像美術研究者である佐野知三郎氏の遺品資料、とくに写真アルバムについて悉皆調査を行い、研究報告書として刊行した。詳しくは調査報告書を参照されたいが、この資料は研究代表者が前職在職中に資料として購入したものであり、その後、内容の豊富さは明らかであったものの、整理作業はなされないままであった。今回、機会を得て実査したものである。佐野氏は大正元年生まれ、史迹美術同致会同人として会に参加し、全国のお古社寺、文物を訪ね歩き、その記録を写真帳として作成し続けた。その記録は、昭和35年11月から平成元年7月まで、8000件以上にわたり、現状、他の関係資料とともに一括して神奈川県立歴史博物館に保管されている。調査報告書では、この研究資料の来歴と、記録されている写真

資料のうち、重要なものを **2000** 点ほど所収し、**8000** 件のリストとともに提示することが可能となった。

調査では、研究代表者古川と日本女子大学文学部学生が主体となり、令和元年（**2019**）度に悉皆調査し、目録を作成した。この調査により、現在では設置状況が改変されている石造物や文化財、亡失した文物の当時の写真を一覧することができるようになった。研究の主題である、宋時代の文物に限定されているわけではないが、石造物の多くが宋風の影響を受けているのであり、広義の請来文物として、研究対象としていたものである。内容的に、必ずしも東国主体とはいえないが、昨年度から研究を開始している西国の什物研究にも関係を持つものが多く継続的に利用できると考えている。なお、研究成果報告書は、適宜関係する大学学科組織、大学図書館等への配布を行った。

（４）中世文書貼り交ぜ屏風の研究

本研究の資料調査の一環として、京都市内の古美術商から新出した（現在個人蔵、日本女子大学古川研究室保管）中世文書を貼り交ぜた屏風について、調査を行い、研究報告書として刊行した。詳しくは調査報告書を参照されたいが、この屏風は、鎌倉時代以降の南都を出所とする古文書を貼り交ぜたものであり、その古文書のいずれもが新出である点が特徴である。大和地方の旧家の所蔵品であったという来歴がある。同文書中には、落書起請に関する寺院内部資料、説草、聖教案文、また、いわゆる「尾張国解文」の写しと考えられるものが数葉貼り継がれており、資料的価値も高い。

本研究の関心からは、古文書が、鑑賞される対象として意識されたことの証左の一つとして取り上げている。本研究の研究課題の一つとして、モノ化する古文書という問題意識があるが、文書が貼り込められた屏風はまさにその好事例であった。什物帳がモノを記した、モノの台帳であり、それ自体が財産＝モノとして認識されることを踏まえて、このような文書伝来のあり方を究明する必要があると考えたからである。なお、上述の解文については、梅村喬氏が「『尾張国郡司百姓等解文写本（断簡）』の紹介」（『愛知県史研究』**23**号、平成**31**年**3**月）として、報告されている。什物研究にとどまらず、本作品の研究は関連分野にも広がりや影響を与えているといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古川元也	4. 巻 18
2. 論文標題 鑑賞対象としての貼り交ぜ屏風について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学学芸員年報	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川元也	4. 巻 6
2. 論文標題 鹿食免と肉食	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 饗宴 肉食・草食・飽食	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川元也	4. 巻 4
2. 論文標題 日本における異性層の系譜	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 饗宴	6. 最初と最後の頁 113-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川元也	4. 巻 16
2. 論文標題 モノに最も迫れる仕事	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本女子大学博物館学芸員課程年報	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 文化財保護法の改正を活かすために
3. 学会等名 大倉幕府跡地の保存・活用を考える会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 中世都市論としての天文法華の乱
3. 学会等名 第32回 法華宗教学研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 鎌倉の寺社と芸能、儀礼
3. 学会等名 説話文学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 モノとしての古文書 - 鎌倉寺社文書を中心に -
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館共同研究
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 モノとしてみる中世文書
3. 学会等名 日本女子大学史学研究会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 鎌倉の日蓮教団
3. 学会等名 鎌倉禅文化研究会（建長寺）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 青磁盤の使用法について
3. 学会等名 神奈川県立歴史博物館調査研究報告会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 鎌倉の寺社と芸能、儀礼
3. 学会等名 説話文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古川元也
2. 発表標題 黎明期の鎌倉研究
3. 学会等名 国宝史蹟研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 古川元也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本女子大学史学科古川研究室	5. 総ページ数 320
3. 書名 佐野知三郎資料-研究と紹介-	

1. 著者名 古川元也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本女子大学史学科古川研究室	5. 総ページ数 72
3. 書名 中世南都関係文書貼交屏風の研究	

1. 著者名 古川元也、阿部泰郎、小井川理、渡邊浩樹、三浦麻緒	4. 発行年 2018年
2. 出版社 神奈川県立歴史博物館	5. 総ページ数 176
3. 書名 鎌倉ゆかりの芸能と儀礼	

1. 著者名 小島道裕、金子拓、佐藤雄基、高橋一樹、古川元也、丸山裕美子、横内裕人、小倉慈司、田中大喜、仁藤敦、松尾恒一、三上喜孝、鈴木卓治、橋本雄太、川西裕也、長村祥知、荒木和憲	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国立歴史民俗博物館	5. 総ページ数 314
3. 書名 日本の中世文書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----